

## 次世代プログラム運営会議 研究者・研究課題審査(第3回)

- 日時 : 平成 22 年 11 月 4 日 (木) 10:43 ~ 11:31
- 場所 : 中央合同庁舎第 4 号館 7 階 742 会議室
- 出席者 : 和田政務官、相澤議員、本庶議員、奥村議員、白石議員、青木議員、中鉢議員、金澤議員
  
- 議事要旨 :

(相澤議員)

次世代プログラム運営会議を開催する。本日は、前回に引き続き研究者・研究課題の審査を行う。本日は、大臣政務官にもご出席いただいているため、これまでの検討状況を簡単に説明させていただく。

〔 相澤議員より、日本学術振興会における審査結果及び次世代プログラム運営会議における前回までの検討状況を説明。 〕

(相澤議員)

本日は、女性研究者からの提案の採択候補に関して、私と本庶議員が作成した案を基に検討することになっている。

(和田政務官)

先生方のご尽力に感謝申し上げます。これまでの検討内容については昨日事務方から話を聞いている。まず、私が持っている問題意識について述べさせていただきたい。この 500 億円については我々の政権としても将来の核として大きく育てたいという意識を持っている。政治的な動きも含めて申し上げますと、このプログラムは、前政権の最後に予算編成したものであり、民主党内でも様々意見があるなかでここまで来ている。

総理や海江田大臣にもご相談したが、大きな方針としては、予算をシュリンクさせることは考えていない。しかしながら、予算を配分するに当たっては、しっかりと内容を見て措置すべきであり、その点については担保したいと考えている。学術振興会や有識者議員の作業には感謝しているが、他方、私と大臣の意識としては、やはり行政当局として本当にそれでよいのかという意思をしっかりと持った上で、実行することが必要であると考えている。

私は予算編成を担当していたこともあり、原点に立ち返ってこの案件を見てみた。研究内容については私も海江田大臣も素人であり、総合科学技術会議の先生方の力をお貸ししたいと思っているが、実際に予算として通している以上、説明責任は求められる。説明責任を果たしていれば、将来に向けて次の予算も確保できる。

そのような観点で、全案件について何をしようとしているのかということ、そして、これを進めた結果、国民生活上どのような利益があるのかということについて、難しくない言葉で用意する必要があると思っている。採択していけないと言っているのではなく、採択すべきだと思っているからこそ申し上げるが、説明責任をしっかりと果たせるよう準備をした上で、最終決定することを考えている。

国民の普通の常識を持った人が読んだときにも、どのようなことがしたいのか分かって

いただけるような簡易な説明を至急用意してもらおうと思っている。そして、将来の効果として、研究を進めた結果、どのような世界が広がるのかということの説明したい。海江田大臣や総理とも話したが、我々は前政権ができなかったこととして、リスクをとって投資をしようと思っている。

現在300件ほど目途を付けていただいているが、例えばこの300件に投資した場合に、300件全ての成功を担保する必要はない。しかし、その中の何件かが成功し、全体として投入した国税がペイするような方針で臨むのが科学・技術のあり方だろうと思っている。このため、そのようなリスクは政治が負うとして、先生方のご提案で順番をざっとつけていただき、そこから先は予算の範囲内で可能なところまでを採択したい。

国民の皆さんが科学・技術は大事だと思っている点は理解しているが、事業仕分け等を踏まえると、疑念を取り払い切れないのが経費の見積もりである。研究の内容については、1つ1つしっかり書かれているが、経費の見積もりについては、私が財政当局に身を置いていた経験で言うとかなりルーズである。

施設の整備や設備の購入について、他の分野で財政当局はどのようなことをチェックしているかという、実際の建物の中に何はあるけれども何はないから買うということまで説明させている。現在あるけれども古くなったから買うということもある。しかし、研究者が出している申請書のどこを見てもそれは書かれていない。

さらに、公務員の世界でよく言われていることであるが、必要な職務を果たすための必要経費は問題ないものの、例えば出張旅費を見てみると、先生によっては1件のご要望について、出張旅費300万円などと掴みで書いている。やはり、これを是として通していくには、余りにも説明責任について不十分ではないかと考えている。

最低限、この程度ははっきりと示して欲しいと考えている内容はお伝えする。これは最終的に何件採択することができるかということにも関わってくる。現在目途をつけていただいた件数に、ここの査定率を掛け合わせた総額で何とか枠に収まるということであるが、そこをもう少ししっかりやれば、夢と希望をもう何十人かの研究者にお渡しすることができる。ぜひ、ご協力いただきたいと思っている。選定する基準については私も十分理解しているが、国民に説明できるようしっかりと枠を取ることにお力をお貸ししたい。

(相澤議員)

リスクは政治が取るということを明確におっしゃっていただき非常に心強い。今回は挑戦的な研究を強く推進するという立場にも立っている。しかし、その意味は経費の算定も含めて説明責任が取れる範囲でのリスクということになるため、十分に留意しなければならない。

ただ、実際のプロセスとして、応募者が求められている必要経費の算定については様式に基づいたものとなっているため、積算根拠がどこまで精査して書かれているかという点については判断が難しいところがある。

(和田政務官)

その点については必要に応じて、研究者本人に確認する必要があると思っている。本件については、予算配分としては学術振興会に基金として出しているため、国の予算スケジュール上は支出が終わっている。ここから先、どのように実行に移していただくかが問題である。500億円は庶民にとっては大きいですが、国家予算としては小さいわけだから、この小さな玉をいかに磨き上げるかということが大事だと思っている。

正直に申し上げますと、まだ総理にはご相談に行っていないが、大臣との間では、磨く期間

が必要ならばかけた方がよいという判断をしている。現在のスケジュールは正直申し上げて厳しいと思っている。ここは国民の皆さんへの説明責任もある。予算として取っている以上、いつまで執行しないのかという話が起こりうるため、どこかで区切りは必要であるが、一度本腰を入れてやってみようと思っている。

(相澤議員)

1,000億の30課題については、ご指摘のあった予算の内容を相当突っ込んだ形で精査し、最終決定した。しかし、今回の500億については、スケジュールのタイトさもあり、この点は十分に考えなければいけない。

(白石議員)

2つ質問をさせていただきたい。1つは正にスケジュールのことで、説明責任を考えると少し延びるというのは仕方がないと思うが、昨年度、1,000億が遅れたために、他のものを含めて年度末になるまで研究費がリリースできなかった。遅れた影響がかなり大きかったことを踏まえ、政務官としてこの点をどのように考えておられるのかというのが1つ。

もう1つは、相澤先生が言われた点であるが、査定は大変な作業であり、30人の場合でも相当なものであった。委員会で1件1件、丁寧に見ていただいたわけだが、今回は300件を超えるわけで、やり方次第ではあつという間に数カ月の作業になる可能性がある。どういうプロセスを想定しておられるのか説明していただきたい。

(和田政務官)

財務省で査定作業をしていたときの経験で申し上げますと、これは徹夜作業になると思う。5,600件であれば、おそらく1カ月ぐらいの期間が必要ではないか。今、申し上げたのは経費に関してのものであり、研究の内容については、先生方にお任せしてよいと思っている。しかし、若手研究者の方々がどれだけ利益を受けるかという視点からは、経費をどんぶり勘定で積算しているものについては、他人の利益を阻害することになるため、その点はしっかり見させていただこうと思っている。簡単に言えば、国民の皆さんに説明できる限り、研究の内容については先生方に選んでいただいたものを決定すればよいと考えている。

(白石議員)

例えば先ほどお話があったように、出張の積算や装置の購入などについて応募者にデータを出してもらうということか。

(和田政務官)

学術振興会がどの程度査定を行っているのか分からないが、本来であれば、行政府部内の作業である。4月に申請が出ており、私も含めて責任を負わなければいけないが、その半年間で1枚1枚確認すべきだったもの。その点は仕方ないと考えている。

(本庶議員)

経費については私も基本的に賛成であるが、査定できる場所は主に設備の問題である。設備は金額も大きく、確認する必要がある。後は人件費の問題がある。人件費は組織で大体決まっているため、何人雇いたいかがはっきりしていれば問題ないのではないかと。また、いわゆる試薬を買うといったものについては、全てのリストを今の時点で細かく調べても変わり得るものであり、意味がない。

よって、やはり大きな機械を小さなグループが自分で持つ必要があるのか、大きな研究科の中でどこかが持っているものを共用して使えないかということになる。何千万の機械を小さいグループが持つというのは明らかに無駄であり、科研費の中でも、そういうことは言ってきている。

(和田政務官)

おっしゃるとおり。微に入り細に入りとこだわっていると時間がかかるだけなので、かなりポイントをつかんでやらなければいけない。先生方の実感をお聞かせいただきたいが、人件費について申請毎にだいぶ差がある。例えば同じ大学の同じ研究所にいる教授、准教授、助教というラインがあり、その人たちで進めると書いてあるが、経費のところを見ると、人件費として准教授を雇うと書いてある。

新しく雇われるのであれば、結構であるが、聞いてみると同じ方のリストが並んでいる。つまり、結果的にその方に大学からの給料とこの予算からの給料が出て二重取りになっている。そのような点はチェックしていただき、責任を持ってきちんとやりますというように言質さえとれば、後はPDCAのサイクルの中で、最終的に使った経費について提出を求めることになる。

(本席議員)

給料の二重取りは大学レベルでチェックしているため、現実的に起こり得ない。おそらく、現在特任准教授といった形態で雇われており、そのファンディングをこちらのファンディングに移すといったことであると思われる。

(和田政務官)

そうであれば問題無いが、この文書上からでは読み取れない。

(白石議員)

二重取りは考えられない。

(本席議員)

私からの提案であるが、経費のところはしっかりチェックを行う。ただし、それは大学当局と本人からもう一度、細かいことを聞くことになるため、採択通知を出す時期と、予算額を確定させる時期がずれるということを許容する。採択ということになれば、研究者も努力する。この点は非常に大きいのではないか。

(白石議員)

私も賛成である。

(和田政務官)

非常に現実的。例えば確定した人から順番に通知してもよい。学術振興会が選んだものを駄目だと言うつもりはない。5,000何人も応募してくれたというのは、国家にとって財産であり、そのうち10人でも20人でも採択できるのであれば、やはりすべきである。

(本席議員)

そのとおりである。

(相澤議員)

大きな装置などについては比較的的確に判定できるが、このプログラムのもう一つの要素は研究費の自由度を確保するという点である。

(和田政務官)

それは理解している。

(相澤議員)

あまり細かく積算を求めて、却って使いにくくしてしまうというのは、趣旨に反することではないかと思う。

(和田政務官)

大枠で理解して、ゴーサインを出すつもりである。むしろ、後の結果として、どの程度かかったかという世界だと考えている。

(相澤議員)

プロセスとして大きな内容であるため、具体的にどのように進めるかは改めて検討させていただく。

それでは、女性研究者からの提案をどの程度追加的に採択するかということについて、現在の検討状況を説明させていただく。資料プー4及びプー5を配布している。プー4はグリーン・イノベーションであり私が担当したものである。このリストの対象としているのは、ヒアリングまで残ったもので、かつ、45歳以下の方からのものである。二重丸が付いているところは、追加候補としてトッププライオリティで採択されるべきではないかという候補であり、グリーン・イノベーションでは●人、二重丸が付いている。

また、一重丸が●つある。それぞれどのような期待度があるのかコメントしているが、これについては採択候補を決める段階になってから説明させていただく。

ライフ・イノベーションについては、本席議員から全体の状況を説明いただきたい。

(本席議員)

年齢が45歳以下の女性の中から一通り内容を拝見した。研究能力が既に証明されていて、非常に重要なテーマであり、若いPIとしてこれから頑張りたいということを中心に見た。資料プー5にそれぞれのコメントと二重丸、丸、三角、バツという4段階で一応の順位をつけた。

私が重視したことは、それまでの研究実績として一定の能力が証明されていなければならないということ。さらに、研究テーマが非常に重要なものであるということ。また、採択者はPIに限るということにしており、ポスドクやどこかに雇われている方にこれほどの国費を投じるということは、やはり問題がある。その点も応募書類の中から十分に確認できるかどうかを見た。

ご本人のPIとしての認識は、非常に違いがあるということを感じた。採択になった場合には、大学や研究科で本当にこの人をPIとして扱い、全て任すということを保証してくれるのか確認していただきたい。

例えば申請書にどのようなことが書いてあるかという点、応募者は所属する研究室に教官室があり、研究を行うための設備を有し、研究室に所属する学生や院生の研究指導を

行っている。また、ファーストオーサーとして論文を執筆し、自己の責任と権限により使用することができる科研費並びに民間の研究費を獲得しているとある。これはPIの意味を十分理解していない表現である。ファーストオーサーで論文を書くというのは大学院の学生でもやることであるし、民間から研究費をもらうということも、大きな研究室の一員であって行うわけであって、そういうことがPIの根拠にはならない。この点についてかなり軽く考えている人もいるし、しっかり考えている人もいる。ヒアリングの中で、このことが十分にチェックされているのかやや疑問なところがある。確認したとは思いますが、そういうことはしっかりやっていただきたい。

(相澤議員)

このようなことも勘案していただき、この中でどこまでを採択するかということについては、本日は結論を出さないということにさせていただく。

大臣政務官からのご指摘をどのように進めるかということを検討し、すぐに進めるようにしたい。

(泉統括官)

現実には1カ月ぐらいで進めるとして、どこまで確認を行うかということであるが、率直に申し上げて5,600の課題全てを同じグレードでやるのは、効率の面からもよくないのではないかと。

(和田政務官)

そこは私の責任において全部見る。それは宣言しておく。やらざるを得ない。政治家として一番原点に持ちたいのは、国税を投入する以上、行政側が何も見ないものを通すわけにはいかないということ。学術振興会では見ていただいているが、実際の担当官が見ていないということはある。そこは肝に銘じるべきである。今まで期間はあったわけであり、責任はとらざるを得ない。

(相澤議員)

研究面からどういうことを目指し、どういう効果が期待されるのかということを確認にすることが大切である。

(和田政務官)

おっしゃるとおり。だから、国民の皆さんに説明できるレベルのものが要ということ。

(相澤議員)

経費面での精査について、五千何百件全てをやるというのは現実になかなか難しいのではないかと。

(和田政務官)

精査はそれほど細かくやらなくとも大体の目途はつく。先ほど申し上げた点が象徴的なものであるが、要はしっかり計算できているかということである。できているという答えであれば、そこから先は内容がしっかりしているからやってみるということ。そのかわり、PDC Aのチェック・アンド・アクションのところでは、しっかりと成果を返していただくということだと考えている。

(相澤議員)

具体的な取り組みについては改めて検討させていただく。

(白石議員)

現在●のところまで絞り込まれている中で、例えば●以下のところは経費をもう一度チェックしたとしても、ほとんど意味のないチェックになるのではないか。

(和田政務官)

国民に訴えかけるものとして何かをしてみたいという研究者が5,600人いる。かなりレベルの差はあると思うが、他の5,000件について、本当にこれでは国民に訴えるものがないということであれば問題無い。しかし、我々の感覚からすれば、その中から10件でも20件でも、夢と希望を持ってやっていただけると思うものは、拾い出していいと思っている。

世の中へのアピールができるような話であれば、それは賭けてみたらどうかという提言である。そこがまさに政治的なリスクを背負うところである。先生方が採択していただくものについては、経費をしっかりと使っていただけることを確認して欲しい。むしろ、我々が最後に政治的責任を負って、この人には賭けてみるという入れ込みをやるということ。

(中鉢委員)

政治の役割とCSTPの役割は微妙に違っている。本庶先生と相澤先生がこのように評価されたことは非常に重要なことであり、有識者として重要な判断だと考えている。それをどのように政治が扱うかという問題は、私は別の問題ではないかと思う。合理的な配慮をすることは理解するが、科学的な領域と政治的な領域を区別すべきだと考える。

このように進めたけれども、政治的配慮でこうしたということを国民に伝えることは政治的にも意味がある。一方、CSTPの役割を明確にすることも必要であり、CSTPとしては、それはしなかったということ。政治がやる仕事までCSTPが期待されるものではないと考える。

(和田政務官)

これは引き取らせていただくべき話かもしれない。

(中鉢委員)

少し言葉が過ぎるかもしれないが、政治は科学の詳細をやるものではなく、CSTPは政治の詳細をやるものではない。そこに役割の違いがあってもいいのではないかと思う。

(和田政務官)

運営会議の位置付けが、CSTPのものとして捕える話であれば、そのとおりである。位置づけとしてはCSTPの一つの組織ということになっているのか。申請課題を査定するための運営会議ではないのか。

(泉統括官)

最終的な決定責任は総合科学技術会議が持っている。その決定に付する案を作成することになっている。

(和田政務官)

総合科学技術会議で決めていただいた後、政府がそれを引き取るということか。

(泉統括官)

総合科学技術会議では、こういう課題にこのお金を投じなさいという意見具申を決めることになる。その意見具申に沿って、政府は学術振興会に基金をこういうところに投じなさいというアクションをとることになっている。

(和田政務官)

総合科学技術会議としての意見具申をいただいた後、政府が責任を持ってやるというのははっきりしている。その政府というのが行政府の人間ということか。

(竹田参事官)

意見具申については、総合科学技術会議から文部科学大臣に意見具申するという事になっている。広い意味では政府かもしれないが、内閣府ではなく、文部科学大臣に対してのものである。

(泉統括官)

文部科学省は意見具申のとおり執行することになる。総合科学技術会議や科学技術担当大臣は学術振興会の所管大臣ではないため、学術振興会に直接行政的な指示することはできない。

(和田政務官)

了解した。また後で整理して教えていただきたい。

(相澤議員)

1,000億のケースと今回の500億の関係が違っているところだけは理解いただきたい。

(和田政務官)

その点は理解している。

(相澤議員)

1,000億の場合には、この運営会議に相当するものがCSTPから離れた形で組織された。総合科学技術会議が最終決定する立場であったが、その下に支援会議という総理が議長である会議があった。さらに、その下にワーキングチームが置かれた。その中にCSTPの議員も入っているが、支援会議には2人CSTPから入り、他は外部の委員であった。審査をどこにも外注せず、ワーキングチームが全部見ており、ここのプロセスが大きく違った。中心研究者を誰にするかということは本会議決定まで持っていき、そこでちょうど政権交代があった。

当時30人を絞るときに、その経費の内容についてはさらに精査することとし、そのために精査を1件1件行った。そのときはここだけでやるのではなく、JSPSに経費の精査の検討グループを組織し、特に大きな設備などについて適切性を審査して、その内容をもとにこちらでまた議論し、というプロセスを取った。

(和田政務官)

かなり厳格にやっていただいたということか。

(相澤議員)

このため結局、交付して研究費を使用ができるようになるまで1年近くかかった。今回は5年の基金ということだが、実質的に4年を割ってしまっているような時期であり、先ほどの決定の時期が極めて問われるのではないかとということもある。このため、かなり短い期間で可能な限り効率的にやろうとしている。5,000件全部について、我々も資料を全部持っており、今までに見ている。しかし、先ほど政務官がおっしゃったような形で、全案件に少なくとも明確なコメントをつけるというところまでは、当初の想定に入っていなかった。

(和田政務官)

査定については、コメントは必要ない。今まで辿ってきたルートは一応聞いているが、それは別に問題無い。むしろ、5,600件、応募していただいた方々に対するメッセージとして、あなたがやりたいことはこういうことですねということを我々政治家が受けとめ、受けとめた内容から順番にこれだけとりましたという言い方で公開できるようになっていなければならない。

(相澤議員)

本日は以上で終了とする。

以上